繪本烈戰功記 後篇 十一

2257
23

へ13
2237
23

池清

繪本烈戰功記後篇卷之十一

目録

上杉謙信明智之事
江間常陸守生害并宮勝合戰之事
上杉家の勇士武功の図
上杉謙信加及乱入之事
柳崎和泉守刎雪之事
柳崎和泉守滅亡之事
柳崎景舎蛇と喰ふ図

上條義春鎮怪異事

春日山妖怪の図

上杉謙信上條軍粧之事

繪本烈戰功記後編卷之十一

上杉謙信明智之事

夫戰去以得勝利要とす。故に機を得ては。數万の兵も屑とせず。見て追ふの風の急なるが如し。退也。見て避ける波の返すが如し。進退変化。勝算を。あやまらざるとこそ名將とす。然る小長右府信永は。松但の後佐々甲斐守。却て謙信の使者を送りて。けるよ依。列又万姫の大軍を使てりおく。謙信ゲ二万の勞を追付んと。准後也。ゲ。思れけん。毛利元人の不利。遽る士隊ゆを呂て。各密汁を授。本陣よりして退れけるが。諸軍も悉く陣を拂ひ。夜中に佐幸塚を步立く

越前國。細呂木城をさしてぞ引きける。時に上杉輝虎の名代佐
竹左右衛門督義重と一揆に近崩さんと。猛
勢破竹のやうに攻られけり。敵に味方の者。故一人も無く
而。敗軍の以前に。独立ければ。先手の隊列。迎の人民を味
で同じ。其者共。何も手負ぜびりくども。けをの波く。後半来
より發立く。佐竹一ツに成て。越前の方へ引入れと云る
ぞ。掃部助泉寺。本庄美作守。新津丹波守。長尾右四
良。これを聞より。益雪。佐竹伝永。高手の軍威に恐怖と
なり。佐竹病神に引立く。疾も逃しとおもひ。
有て。時を移さず。退対べしと。手勢を励し。和泉の
退んとすると。佐竹後陣に在く。本郷に馬を立れけゝ

初と雪より急に軍使を発て。諸軍を制し。固中めく
先を退さび。列先鋒の諸隊列と発して曰。佐竹永ちどの
者ゞ。大軍を後ゞ。佐竹に味て。一向逃に道ゞ。
い手神速に雪ゞ。敵対ゞ。一先
来城を避く。列先の道く。佐竹
味方退ゆゝを。四人國に引入。
との計策ゆゝ。おのく仕様と京せびして退列。
元が不覚のやうに雪。人の不為。佐竹に味て列き
計策に偏べそうい。されど佐竹永。疾逃除ゝ
笑れけゝ。列神ゞ。雪人ゝ佐竹に味て。
ゞ。遠下先鋒の中より。出抜ゝ。佐竹の如

よ。伝永八ヶ所よ伏勢と擬。奇計と布て終居られけ
ゆ。れ知ければ。諸軍伝伝の明智よ感服して。又
伝永の武略も偏りがたと知く。元こあれの智謀の程と
ぞ嘆美しけ

江間常陸守生害并宮腰合戦之事

平義上板家の幕下に花形玉宋を領したる白鹿越前守
と号大名。同玉の江間常陸守と弟掃よ及びけるが。江間ハ
甲斐の武田の麾下として頗武雪の一れたれば白鹿
偏利と得ことの羨と知く。越後玉へ使者をかけて云
て曰。花形玉。江間常陸守ゆ。武田家の彊尾よ附て武
威よ強。振もとれば四中と乱し。此領へもるを入んと

と。然らば不肖ゆうとも柔。直先ま
と。急ぎ此退治て有こ。然らば不肖ゆうとも柔。直先ま
と。彩骨と尺というんとぞ頼ひ入る。伝伝ゆ
出ん。常陸ゆ。孔妨いゆ屈ゆ入べも。花形玉出陣と義ハ返
返言よ及べ。こと。使者と返されけるが。二月と待て後白鹿
より。江間退治の儀とぞ頼出ける。義よ和て。上板の老臣等伝
伝よ。ゆめて常陸ゆ伝伝延引よ及てハ。彼武田の麾下たるよ
怖て。諸家出陣の沙汰よも及ばひ。白鹿中紹いば
此武名の雄強ゆ。べくいうんと。云上ければ。伝伝覚
ホと而。今諸家の武威とん。武田の引玉とはんよ。伝云板去の
上ハ甲斐ゆとも伐捕んと羨よあ。然共敵ゆ出
さざるハ。若宋の勝利ゆ。近年武威の表たると倖ふ

須臾に奪掠して。天下の朝を受けんことを。恥辱なるべし故
に。併に諸方陸。武威を湾て。国中を乱も亦是なるべし
旦。彈越中の分国は。彼れ南国微勢なれば。特に小田家
ん。越を奪れば。小田家を奪れんと必定なれば。手合
に力を絶し。彈一国を平均せんと。暫て食庶の挑発
らん。彼て向原の兵を往せて。早く出べし。中て
原の兵を伴家し。急陸船あり。八千俵の軍勢を率
て。彈の国へと向られけるべ。白原越前守。一千俵を率
加り。に力を居城へと推寄けり。に間陸守は
刻の雪降られば。世無原せば。守汁を蚤して防戦
悩の数回。中甲兵を告く。加勢を乞けり

468

尚下甲兵を往は。武田彼れ。に間彼は家や吉。急ぎ後
告ぶ已を己を陸られ。の不を。長坂丸金吾入乃彼家に
べ大坂小彼資。被を陸て曰。去年長篠の一戦を。に南家
武功の士隊を及。雪力士猛率討死被てより。に武威衰へ
に遣云を往せ。強兵を憑へ。に間を陸守に
るを為へ中せども。上杉百騎を文あり。に南家の不宣
り。彈陸に陸の後は。に止りへ。稀を文は往
彼れ往縁の色を顕て。るを左右を。出る延引を及
びけるを。に間上杉勢に攻詰れ。陸守父子切腹
而。長坂を及びける。あを。それ伝云生世の討を。に間滅
云を及ぶきりを。彼れ嗤弱みて義伝亡ぶを

可惜雪月を持殺さんこそ。先と憚る彼をあざむいて
嘆息する事ぞ多かりける。別て弦伝へ。白屋越前守ぞ
山賊の宴功よ。郎従一騎の守護を命じ。手の外仕手等
くれ給ければ。山賊加様よ入く。小松の城と攻寄ぬと。軍
議を変て推出さる。宴よ小松の城内へ。小勇家よう戸次左を
と城代として指置れけるぞ。山賊弦伝飛騨よりおへ入
ると聞ければ。隣国越前よ互ひの。小勇家の雪将軍
柴田勝舎。雪田を大将として。柴田伊賀守。佐久弓玉島
叶兵衛八。京者次郎八郎紀猪。小松の城を被
ちんとて。宮腰よ出張す。弦伝飛騨国。
越前国
整さる。弦伝先と馳着く。小勇の被官共ぞ。出張

たるぞ。いで蹴散てやらんぞとて。勇と五騎よ乗。武風乃
起ぐ如よ進らる。一の先へ抑伝和泉守京舎。三百騎
そおそかう。若も先く可来ぐ彼を抑伝
伊賀守勝舎。佐久弓玉番感政入勢て打破へ。上松の二の
先。安田次郎お捕順易。抑伝と扶て推寄る。雪と奮て戦
ふ事ども。柴田ぞ備些者ども。けて見ける。佐久間玉番大
に成て遂者共弦伝とても鬼神中る様。対面て名せよと
自大声とりぐ。と云る歌を打ひ。味方と励し戦へども。
安田ぞ猛勢強ければ。中にも上金沢弥次郎と名乗。濃黄の四
方目縅の鎧を着て月と重き。下れ木綿と紙と紙よ付る旗懸て出先
よ乗を。獅子の念ぞ。ぐれ働。佐久弓ぞ伝と突崩出給先

十文字

第四

にひしの者。命を落さんといふことなり。見る次て荻田
与三兵衛の絵をん突へ。柴田の雪士毛屋又八良を討死
せしもをで戦へはどる。さすがの佐久乃ぶ勢も。四方路みな
ちりとなて。柴田。雪田を始。原虎次郎等。彼をやり出さん
とすれとも。上杉伝兵衛。鷹狩歩振実ぞ強れ者共
せ。るるるるれ下知あれば。竹股三河守朝綱。甘糟彼中守清長
平賀志摩守勝経。勝頼を採て三百騎。疾風のわ柴は三郎
三郎蒐立まべ。小勢の勢逐る蒐崩され。越後ぞ主義而。
死傷の者数を尽べ。義故宇佐美駿河守定勝一騎。氏
幼お補定勝。盛る安田ゲ備る加り居るけるゞ。大勇の絵
ちん働る方の猛士。佐久乃ぶかを討死。又柴田の雪士

傳にまこ丞と絵を合せ。火出るほどる戦ひゞ。勝頼改せ
而。りのこれとゝ。千絵術のまる烈しゝけゝ。故味方
共る感賞ゝけり。此傳にハ。後る亀田大隅と号して。柴
武名を弘る雪士ゝ。刃て伝兵早も退止を令し。猪岡
と揚て拉但の城る入く。人ゝると休め。まゝ軍功を賞せられる
ゲ。中る上会治幼ゲ働。抜群ゝて。襄英の上。上会ゲ
絵の。月の下に木綿画ゝるとゝ。伝兵衛ゝ古今
をゝまゝ分られゝ
とゝさゝるゝれ系山の禁ゝゝ。蘭系の禁の空代産ゝる故ゝ
此上会ゝ。大刃の宝有ゝゝ
刃ゝ徳ゝ。千絵上会ゲ家宝ゝゝ。世ゝ系伝

472

たゝかふことゞ。弦之丞須佐殿玉の地士。下尾伯耆守。平岡山城ち。逆心而。水沼の城よ建義の類。岡玉の士。沢根羽蔵ろう松倉左をしけるよ依て。弦之丞急ぎ佐殿玉を結んこて。小松の攻城を延して。一失就後へゞ凱旋をける

上杉謙信加賀乱入之事

越後之。大和玉之門志貴支城の主ろう。松永弾正お弼久秀。小多家之属して。摂津石山を攻んがゝ。天正元年丁丑正月よ。越後玉之支侯けるゞ。弦永と結るゝ。天正元年丁丑正月よ。越後玉之支侯と送り。久秀事。近江天王寺を引取。本玉和泉よ引取。岡玉の間弦之公ゝ。小玉通と越後へ攻伐。中国の毒ゝ申へて。京都へ攻へ。小多家を退治仕べき

のる。拙之紙をん申へ入れべ。弦之丞承諾ゝ。紙約定の返簡とゞ書いされけ。然よ羊の秋よ至へ。松永久秀。和泉よ於籠城を揚。志貴多門よたて氣ろう。小多弦之助万勝と対さる類。御〻〻安けれべ。弦之丞越らべ。伝永を討捕の対義玉案せりこて。多合と定。三万餘騎を引率。天正元年九月上旬。越後玉を立出して。越中と推通。加賀玉よ入る者。此玉へ。小松安宅。山乃山。小多家の法れの義ろう城ろう推通。是を攻ること急也。弦永安土よ立て中の守。大よ殺こゝれ。城ろ小弦之助。松永ゞ対人と而。和泉よ而ゝれけ。何共乗ゞ。遂よ月四万八千餘の大軍と引て。即対よ江泉を立て。越後へ赴て。加賀の玉ゝゞ。かゝられる為ゝ。上杉弦之へ。既よ小松安宅。山乃山の備城を攻落し

石動橋より陣を居て。小豆坂の方の味方を待形勢。強盛天を衝雪崩
地を裂斗りぞ。柴田。徳山。不破。丹羽
川。丹羽。原。前田等の勇将。各隊伍を組。石動橋より
一里半を隔。川を越てぞ陣を張けり。対して敵大将。小豆坂信長
越と陣を張居て。信長の後陣より来り。夜中に
川を越。密に先手へと加られけり。是は人強敵なる徳川
方なり。信長向ひ〜と知れて。夜に大なる事を思て。形
密に人を陣へ一戦こそ。天下分目の様なれば。
りこそ。敵陣は唐崎を呑べき。雷に成て。信長より
鬼小信弥を以一志を投者として。小豆の陣深く進。信長
の剣の一戦と云へられしなれば。小豆方も約束して。一志の

手を分て信長。又清正等と合。遠より陣を拵て引取。越家
信長川を越て。早く越前の金ぶを進ぜられけり。
石動橋より攻かければ。信長大なる拵。
信長なるべ。くく踏ぬして。川へ切込べきなりと。敵中の退
散。信長軍勢一度功名也こそ。又秀吉軍勢乱れ立ぬ。別て卯刻
より推出して。小豆家れ勢を追て。越前より城を
敵火をけれども。信長些も揺ぐ。清正と陣切て。江
見長浜よりぞ引取れける。越より十月十日の夜より。和及志貴の
陣落城。信長も安ければ。信長賛嘆
て。信長主従を賞せ。去られば何
没ぬほどきあり。信長も運の信長

るまでと堂拵いまされ。今い近付て。強て近付
新谷原かと侵者として。長尾より送る。小豆の家へ云入られる
様に。先日一戦と紹し。信信紙着る所。相云遠よるを返
されて。既事空清。手上付意宇〻家より向。積年山を越て
戦場と如何。信て。信信も飯田社。来天二月中旬より必
越後を立て上洛仕べくの為。手付ら相云も安土を生れ
いつぐ。奥元の一戦を遂べくいと云べければ。信永刈信信の後着
新谷原かと対面して。信信越るの為。弟信仕い
実より武辺い誰も申べくるまで。信信の出手参り
給へ。摩利支天の不変の業として。日本一番より長を比べた
りの見やうべい。来天弥庄上洛より年てん。途中まで出迎

扇子一本便より指て。一猪。楽の山。信永出
と云て。支ろう京却へ楽内者を殺さん。然ば流石の信信
も。信永黒幸。髑骨を垂て元信い天下を。呂上らるるの
ぬまでいい。然いつぐ。信永い西国。信信い東国を代殺られ
上杉小豆の女婿とん。禁裡を守護仕べくと。云僧小宗
殺を受で。後ったる返言をければ。新谷も弱で弟。三郎て
乗細ら上又及しべ。信信見を中の為。信永例の巧云とん予
律を後ろ。後ろを又ぐ如の策計。今ら不始ろの出とて第を
ろうぐ。先ず交攻区城ろう。雪士を選で義元。まく義今を作
ら上て十月廿三日ろう。越後出へとで般法西けて

柳崎和泉守刻雪之筆

[illegible]家の種子。柳河和泉守家会。今度飯塚の途中
にて。刺殺のよし。越後国名立の里乃
里正より。久四郎[illegible]者。年ごろ柳河藩にも蒙られ
て。先月強盗。加害を蒙の者。柳河先祥より
来りて名立の里を推通りけるゆへ。久四郎又子。道路遠不平
依て。作遣りける。諸軍中[illegible]
を。押[illegible]て。久四郎[illegible]
[illegible]の又[illegible]
[illegible]哀より[illegible]
より[illegible]
大[illegible]

[illegible]
敵仇。通夜懲悟而。今日平[illegible]
命[illegible]
[illegible]
[illegible]
より[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆゑ[illegible]の奇病を受て終りに[illegible]死よりこれ[illegible]ふ数の罪を。[illegible]ひ[illegible]ろる[illegible]。抑淀朝よりより抑淀殿舎。徳軍よ後まで。久四郎が門とるるとそつ[illegible]と[illegible]へ来て。[illegible]蛇を痛るゝハ何不ぞと問けるゝ。柳義踏躇て畏こ[illegible]不と答ひれば。抑淀殿や[illegible]郷と紙て載中よりこけ[illegible]の石を足うて跳起し。彼壺を引出し。中うる蛇を行るゝ拙で一宝よ取。[illegible]久四郎が而よ[illegible]紙て。此孫お[illegible]痛を[illegible]ハ情さお也とて。蛇の[illegible]よりして。[illegible]と嘲哈。笑ふ[illegible]と舌出て。久四郎[illegible]邸へも出て来よと。云[illegible]るゝ[illegible]跨て。[illegible]ともこんでとる[illegible]ける。久四郎と始。家族皆汗と消て。恨果て居うるゝ。思[illegible]

うゝハ久四郎。爰のさめたるゝ[illegible]く。我ゝ[illegible]。無去[illegible]止て。忽全快ゝ及びけ。家族の歓[illegible]ん[illegible]おゝく。只抑淀殿方と[illegible]ゝ居ゝる。[illegible]より抑淀殿方[illegible]。[illegible]。振[illegible]。[illegible]。[illegible]。

478

上杉弾正伝飯山にて後。手領とる不。越後。佐渡。北陸。越中
能登。加賀。出羽。信濃。等の小大陸船おこく。永年三月に
弾正伝上洛の首途とぞ定てれける。越より頃ふ。柳斎
和泉守京舎と。内こ小あ家よんと寄て。おんぼうを企の
由。北中風説頻世々れ。弾正伝兎と虚説也らて。秋菊丸
柳斎又ふ小盃勢命ふ。けふ伝。柳斎も安堵のおりひ
とみて。弾正伝の仲にこ。柳斎和泉ヒ。越伝と
蒙る。手いこれ丑ふ。京舎曾て良るとを打
たりける。天正四年の夫。良るとと方へ書よきーけると
伝永京都は上く見と。ふと拍て収び。上杉君伝のるとと
べれ手返ふよ上と。初る代曳来りし者と呂寄

るの價。十場信ふ買乳。牧信ふ長伝永月京とん。ふ交拍とせられふ
のる。近代の強足ふて。大悦の子のふ。ふふ付てふ柳ふよ中ふて
へ蒙るの近ふ。の中。泉蒙る。ふ手まふ。行平側く信長
とて。勢ふ無て這ふれけ。柳斎これを実とおりひこれ
より小ふ。雑泉蒙を探索して。交ふ寅側て進上後
けるべ。信永これを悦ふ。ふる柳斎を送ふ
る。数回ふりけるにより。人類ひく。秋越君とぞ蒙りける。
千年十月上旬ふ。信長伝家ふ。平賀宗左衛つ。吉ふ中勢
と呂て。柳斎和泉ちと付
領承して。各手配と定。越
と。推ふ出けるふ。柳斎系
系舎ハ毎交信伝の題命と蒙ず

中へよ。彼あるべしとこれ中ひとり〳〵行べ。何の雑兵もなく。そこ敵い軍まで。仍宴しとうけるゆえ。ゆゆしんで入るのなる

発しくきこえ。けるべ。抑御京舎むかくと起。良堂とちんで

こえしむるよ。右に中勢ゞ旗下。嬢越よこえうう。数百騎

の軍勢。門不なちく押よせてこれなると告くうければ。抑御

ひかくうして。おのゝこれてかふりけ。こえふ御とおよう

て。妻子とこえ涙し。大きふく。抑御和泉守ゞ揉ものも

怪うしべ。なゝ殺よせたうん。行出で。名乗なんと。おがう

けるべ。妻子れ中より騎る武者一騎。くゝと乗妻抑御

京舎。強係嘉弘よりけく。古に中勢対ま

とてひうう。これ早陳謝のけふ〳〵べ。家なよ死と出べと

るらうるで言なる。抑御守ゞうう大よ怒り。手館のなよ

形骨と歯し。強欲と傳。死地よへるる数と家知ぞ武

功をべ図。本れ実否もれ乱而。無勿よ対ま指向らうるの

条寄怪られば。勇士れ本云よ切乱て。然と黄泉よ報ゆ

べしぞ。雑徒の間。門外よ騒られうとなうる。徐ゝとゆ立

けるべ。早なる共三人と始。家のなる良堂れなくまひゝくと

外をかるる。切て出べ猛勢てで和う。抑御大よ成足と

主従一百人。遂て廣座よ踊出。内ゞ要須とれ。去来妻子去共

とて門べ孤とひくきければ。結設なる古に勢。武雲のゝ

ばまくべくに込へう。抑御主従切先と採。電光のごとくに

動へ。ゆゆ死の勇猛なるべて。さゝりの道兵切まうれて門

よう弥へ組とひく。されども敵まるる大勢なれば。先陣ひけを二陣うけへ。進出せばまた是こへ。若勢とよて切結ぶ。當下後軍に續る平賀宗左衛門ぐ又百騎。後ろの方へ推寄けるぐ。裏門とバ歩破。関を他て切入。大陣の掩ぐ所にかりされば。さしもの柿崎勢。第後の敵よ防ぐ。ちこよかしこまる討死して。残りおよ方ちうけ。柿崎父子。今うを是まで。やはらひけん。中門よ並居て。自害して伏ちうけまば手負の者共も。死狂ひよ働て。朱よ染くぞ討まる。吉江平賀の支雄。柳崎又ゐぐ首と切て。勝岡とよてぞ引ちける。今朝卯の下刻より。巳の刻まの。戦ひよ柿崎方一百又人切死して。手負の死傷二百人ぐぞ及る。実よ柳崎

ゲ一世の働。見えしかし事共なりと。人皆感嘆ぐちける。後伝も知。紀代の色といえども。宗舎ゲ武功も亦拾ぐ。とて妻妾及。一統の者ハ。手負みくさ。されて。柿崎の一統とて。越後の武士の中にても。聞き家なりける。宗舎初ハ弥二郎と号て。上杉摂磨守定憲よ。酒順ぐ。大刻の去れ長尾為景宗英女を給ければ。宗舎忽ちぐ。りてこの上杉定憲を級ハせ。為景ゲ麾下と成ちけぐ。為宗ゲ死の後。迷ひ。照田よ一味して。長尾家と背けぐ。又反忠前照田ハ盜ど敵。殺して。夫ちう。後伝の味方といられ。宗舎迷ひの為ゲ共。甲越軍紀二編。紀。

雪ゲ。びうして。越後国の二天と称せ。ちう者ゲれども。彼ゲ。弥仏の癖也。故よ。今ハ小幸家へ内通のゲも。実ハ武こそ。

こそ。後伝別の虚実と糺されぞ。速く紀罰をこそ。
是こん紙を惟よ。抑後弦雪垂数〻られども。甲及の弓場山孫抑と
い。田と同和す論者よい伊び。彼い忠と垂〻。死と殺て英名と
末よ伝く。是い跡仏と懐。身とこそ奥名と既性ふ流せり代

上條義春鎮怪異事

天正元年十二月よ出て。後伝特呉ゐて。上條
の城主上杉山城守宗義が家督とせらる。抑上條家を
ゆい。そ先足利将軍尚氏の外戚。上杉氏紀太補憲顕越
後上野。伊豆三ヶ国の領主ら。憲顕の末ふ憲栄。出家道
世あり〻ら仮。家老長尾景ら系出功と励て。憲栄ら息
弟命丸と元立。上杉氏紀太補房方と号。れ続て越

の守護ら。そ房方の姉ふ。相方の末ふ。去度頼清方に
越後の内ふく。上條を領ら。夫ら出く。清方と
上條殿と称。清方の子。房実。そふ。去度頼定実。約
後伝の妹聟ら。定実去ル天文十九年に逝去あく
実ふ子ヶ故よ。定実の弟。山城守宗義を遺跡ら
宗義ふ。ふ故て。上條氏紀太弥太郎と家督と守。是が
して。上條氏紀太補義春と号。弥太郎面目比類ら
者平。そ上条勝ヶ妹聟ら。成弟一ふ冠ら
越ふ山比。そ去度頼定実ヶ後家。若通院殿の銘ふ於
不例ふ事ふ。毎夜東夷人歩まれば。四人すふ
足ざる程の人形の。甲冑を着ら。おきてふ歩ら。

の中より出でて。彼方此方と徘徊す。直宿の者。近づけて見ると云へどもそれ。忽消失。頃更て又糸のごとく宗四郎ゆゑ。見狐狸の所為なりとて。雪寺の侍女なども。見すまして。おんとされば消失。捕んとされば又出て或老女。うさうげなる所為。見届けるよ。人形の如。抑侍和泉守殿西ぶしよ。些も不遠と云ふゆゑ。人々怖ふ事一宗よ入者ゆゑ。さうらけ。見とさん怪と思ふの所よ。本城春日山の昆沙門堂の後よ。殺害逆さまよ生さる人。殺害て敷と掩くるゆゑ。夜々よふく。人と近寄ます。又英雄女。約先よ立塞とされば。又怖無姿と変ゆゑ。見よ約逸去肝を消。悶絶。辟地せゆゑといふ。是。実形の報も

亦。抑侍和泉守殿云稱しけるほどよ。疾よ入ゆゑ昆沙門堂の色をる者ゆゑ。此所を化ゆ大路とゆゑ見名しけるふ。上條氏弟左浦義夫。見を聞て。武疾夫日山よりの帰さる。試見とて。然ゆ後れて。小童一人を色して。彼大路を通けるふ。何しも所変の下旬ゆれば。寒風凛烈として肌をうち出凄さ疾の路よ。下弦の月の新冴て。猶まる雪の山々の光を係し京者こそ。実此所の係るれとて。義夫お奥じつゆゆ。出る古松の所て。ちゆよ。ゆ。約先よ枝を伸ける。義夫疾見つけられども。然と寒ゆ新よ約よ女も行ゆ女わつ義夫疾見つけられども。然と寒ゆ新よ約よ女も徐ろ〻来れり。近づくまふ眸と定て見とされば。色よれ衣と言ふて。赤き縞と云る女の。色山茶の匂ひ。けだし

484

笑容のりんとせよ。玉くしみのこばをうちたるぶ。ゆもいそれず
きにけりよるべ。客姿うつ移べ。義春。実ゆるふん遠ざ
りけりとゆひ。お近づれ。彩も赤ぬ体そ。ぶごろう寄て
御と引捕けるよ。空と振ぶ。姿も失面紙もえんぶば
義春。見ぶうの者の。何程のうち仕出さんと。猶云しと出彩
ぶ。彼れのかよ面る付よ。河と一数の。大空又呼者あ。ゆ作え
れべこいうに。次第の女の姿の作して。髪結逆さ法よ。せさる
者義夫と眠て。れの捕よ。そ御立う。義夫性も強
然とえ乗られべ。恋とる新。抒情京舎ふぞ作ぶる
義夫云業と爰ぺい抒情ぶ怨霊亜といいぶ。実よ作ぶ。ゆも
あ。呼ぶ。京舎ぶの者。亡霊ゆもせよ。女よ紀ても。手ふ向ん

こ。かなたびして。れの捕よ。四乗ぶる。何那て義
やと。抒て。ぶ。ぶと笑ひけれべ。ひ理よや和ぶうけん。又戦勢
あや孫しぶうけんさも凄じ。ゆ已夫形の者。雲霧の作ぶ
ぶに消て。只れ風の影而ぶ。ぶ新れう。義夫の色ぶうけ
小寺ふ。疾も問絶して例石ぶうと。義夫に手に引提て。ゆて
とゆうけぶ。夫ぶして怪れ出ることぶ。若通流の人形。生
現ぶる。結りけるこそふ思ぶすぶれ

上杉謙信上洛軍物語事

那五年も暮て。天正六年に題りけれべ。越府の敵よ於
い。元日の事。城中郊褒の物宿。年始の住祝ぶ。畢て。弦法
備老臣と呂て。軍後と定。正月下旬ぶう。上洛の儀再須

486

玉へそ解出されけ。先能登。越中の勢へ三月を後
を分て路次をそ加へられ。北陸の諸の武士へ。あ
節。越中五川まそ来給さど。其後。庄内。上野。信濃
の諸軍へ。三月又日本後より。越後小春日山へ来給さど
とそ命ぜられる。彼也けるほどよ。二月の下旬より
し。越府へ発し来る軍勢。陸續として雲霞の如。彼
来到て紀畢られべ。三月十日。肯途と定めて。九日より
とそ採られけ。お好よ人々共。上條民部少輔義春。亟江
山城守義綱。新発田周防守治時。板垣兵部陸奥守信憲。飯富
下野守朝信。小幡丹後守長國。本庄美作守繁秀。同越
後守勝長。安田上総介景易。川田宮内

守長秋。竹股三河守朝綱。岩井備中守綱俊。五百川修理亮
弘春。加地但馬守秀綱。山本寺勝義。毛利修理亮長
実。山吉玄蕃允親章。中條越後守景資。長尾左四郎景
秋。後上野介安州。鬼小路弥太郎。其外上信濃。
庄内の勇士。熱勢五万六千余騎。旌旗を靡かせ。
建。猛將猛士。甲の冑を加へ。冑の紐を連ね。隊伍
を守て整正。形勢。數々整て。雲霞の如。
而。進發を待諸軍の勢。いまし〳〵ことそえ。

二行